

1. 開催概要

| | | |
|-----------|-----------------|----------|
| 展覧会名 | フランシス・ベーコン展 | |
| 開催施設名 | 会期 | 入場者数 |
| 東京国立近代美術館 | 2013年3月8日～5月26日 | 126,191人 |
| 豊田市美術館 | 2013年6月8日～9月1日 | 33,981人 |
| | | |

●開催概要

フランシス・ベーコン（1909－1992）はアイルランドのダブリンに生まれ、英国ロンドンを拠点に活動した世界的な画家で、ピカソと並び20世紀を代表する画家と評されている。プラド美術館やメトロポリタン美術館など海外の主要な美術館で回顧展が開かれているにも関わらず、日本においては紹介される機会が少なく、世界的な評価と比べると、その知名度は低かった。国内では生前の1983年に東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、愛知県美術館を巡回する展覧会が行われたが、没後は長らく大規模な個展は行われておらず、今回の展覧会は国内で30年ぶり、没後アジア初の国内巡回展となった。

本展では、ベーコンにおける「身体表現」に着目し、「移りゆく身体 1940s - 1950s」「捧げられた身体 1960s」「物語らない身体 1970s - 1992」「エピローグ：ベーコンに基づく身体」という時系列による4章で展示空間を構成し、ベーコン作品に加えて、同作品に強い影響を受けた日本を代表する舞踏家・土方巽の記録映像の上映と、ウィリアム・フォーサイスという西洋を代表する振付家のダンス映像のインスタレーションも紹介した（後者はドイツの若手アーティスト、ペーター・ヴェルツとのコラボレーションによる作品）。

出品作品は、初期の1945 - 46年の作品から、最晩年の1991年の作品まで広くカバーし、6点のトリプティック（三幅対）を含む33作品によりベーコンの生涯にわたる作風の変遷を伺うことができた。「教皇」、「スフィンクス」、「ゴッホ」など、ベーコンがしばしば取りくんだ代表的なモチーフの作品もそれぞれ複数点揃い、とりわけスフィンクスについては、世界初となる4点が並ぶなど、回顧展としても意義深いものとなった。なお、多年の研究をもとに組織され、今後の研究促進に貢献し、学術的にも優れた展覧会の企画構成担当者に授与される「西洋美術振興財団学術賞」を、担当学芸員の東京国立近代美術館・保坂健二朗主任研究員が本展にて受賞した。

報道においては日本経済新聞紙上で、美術紹介で定評のある「美の美」で3週間取り上げたほか、夕刊での連載「ベーコン展・魅惑の一点」や、画家ベーコン自身の魅力についても報道した。「Francis Bacon: The restlessness of human existence」(The Japan Times 3月28日)、「ゆがんだ身体、現代映す」(朝日新聞4月10日)、「感情の揺れを表現」(毎日新聞4月17日)、「閉鎖空間の孤独な身体」(読売新聞4月18日)、「生の痛みが刺激する」(産経新聞4月18日)、「歪まない背景世界」(中日新聞3月22日)など、各新聞において大きな扱いで展覧会評が掲載された。美術専門誌では『芸術新潮』と『美

術手帖」が同時期に大規模な「ペーコン特集」を組んだほか、多くの雑誌やネット記事に掲載されたり、ネット上での「ロコミ」が活発に行われたりするなど、大きな反響があった。テレビでは、NHKによる「日曜美術館」での紹介に加えて、身体表現に焦点を当てたドキュメンタリー番組「ETV 特集 人を動かす絵 田中泯 画家ペーコンを踊る」が放映されるなど、通常美術展にとどまらない広がりを見せた。

2. 補償制度の活用による国民的利益に関する取組結果

補償制度がなければ、作品の評価額が極めて高いペーコン作品を33点も、しかも国内の2会場で紹介することはできなかった。本展を、大規模に開催でき、多くの国民の皆様にご覧いただくことができたことが、最大の国民的利益の還元であった。

(1) 高校生の入場無料日の拡充（東京国立近代美術館）と夏休み親子連れ来館促進（豊田市美術館）

東京国立近代美術館では、中学生以下の入場無料に加え、高校生を対象に3月と4月の土曜日・日曜日の計16日の入場を無料とした。該当日の高校生の来場は、非該当日に比べて1.8倍の来場があり、その効果が認められた。豊田市美術館では、「特別な15日間」と銘打って7月20日から8月4日までの15日間、中学生1名につき保護者1名が無料で観覧できる還元策を実施したが、当初想定の3割を超える来場があった。

(2) 教育普及活動の充実

国内における知名度が低いため、この機会により多くの方々に画家ペーコンを認知し、理解を深めていただくために、多彩な関連イベントを多く実施した。

【東京会場】

(1) ペーター・ヴェルツ氏（本展出品映像作家）講演会

3月8日（金）東京国立近代美術館講堂 97名参加

(2) 映画「愛の悪魔 - フランシス・ペーコンの歪んだ肖像」レクチャー&上映会

3月9日（土）、16日（土）東京国立近代美術館講堂 各140名参加

(3) 茂木健一郎氏トークイベント（聞き手：鈴木芳雄氏／美術ジャーナリスト）

3月21日（木）京都造形芸術大学・東北芸術工科大学外苑キャンパス 220名参加

(4) 学芸員連続講演会 東京国立近代美術館講堂

3月22日（金）「初級」同館研究員 栢田倫広 150人参加

3月30日（土）「初級」同館主任研究員 保坂健二郎 148人参加

4月5日（金）「中級」同館研究員 栢田倫広 150人参加

4月13日（土）「上級」同館主任研究員 保坂健二郎 150人参加

(5) 特別講演会「無秩序の中に秩序を見出すーフランシス・ペーコンのスタジオ」

4月6日（土）講師：マルガリータ・カポック氏（ダブリン市立ヒュー・レーン美術館、コレクション統括）東京国立近代美術館講堂 150人参加

(6) ペーコンを偲んで - ドキュメンタリー映像上映会 東京国立近代美術館講堂

4月28日(日) 解説:同館主任研究員 保坂健二郎 150人参加
 (7) アイリッシュ・ハーブ・フルート演奏会 - 午後の調べ 協力:アイルランド大使館
 5月11日(土) 出演:ハーブ 菊地恵子氏、フルート 豊田耕三氏
 東京国立近代美術館講堂 140人参加
 (8) 舞踏公演「偏愛的肉体論」 東京国立近代美術館講堂
 5月18日(土) レクチャー 講師:慶応義塾大学アート・センター 森下隆氏
 公演 振り付け・演出・出演:舞踏家 和栗由紀夫氏ほか 150人参加
 【豊田会場】
 (1) 田中泯氏 ダンス・パフォーマンス「献上」
 6月8日(土) 豊田市美術館エントランスホール 150人参加
 (2) 映画「愛の悪魔 - フランシス・ベーコンの歪んだ肖像」レクチャー&上映会
 6月22日(土)、23日(日) 豊田市美術館講堂 各130、115人参加
 (3) 舞踏公演「偏愛的肉体論」 豊田市美術館講堂
 7月28日(日) レクチャー 講師:慶応義塾大学アート・センター 森下隆氏
 公演 振り付け・演出・出演:舞踏家 和栗由紀夫氏ほか 120人参加
 (4) 講演会「ベーコンがいつもフレッシュで美味しい理由を考える」
 8月3日(土) 講師:東京国立近代美術館主任研究員 保坂健二郎 120人参加
 (5) 「ベーコンの故郷 アイルランドの昼下がり」コンサート 豊田市美術館講堂
 8月11日 演奏:名古屋工業大学准教授 ブライアン・カレン氏
 (6) ベーコン展開催記念「DECK PUB」 豊田市駅前デッキ
 ギャラリートーク、アイルランド音楽の演奏など
 (7) スライドレクチャー 豊田市美術館講堂 講師:同館学芸員 鈴木俊晴
 7月6日(土)、14日(日)、8月12日(月)
 上記のような一般に向けたイベントのほか、東京会場では教員向けのレクチャー(3月17日、東京国立近代美術館)、学校・団体単位での見学会の受け入れ(中学校1校、大学5校、生涯学習/学術団体など5団体)、出向いてのレクチャー(大学4校)なども積極的に行った。東京の会期終了後に依頼が複数あったのも印象的だった。豊田会場でも学校・団体の見学会の受け入れ(中学校8校、高校5校、大学10校、生涯学習など11団体)、出向いてのレクチャー(大学4校)など多数実施した。

3. 事故の有無(軽微な事故、ヒヤリハット事例も含む)

ヒヤリハット事例を含め、事故はなかった。

4. 安全配慮に関する特別の対応

所蔵者や関係者と十分に協議し、国内外の輸送においては、航空機やトラックによる計画的な分散輸送を行い、リスクの低減に努めた。展示作業も無理のないスケジュールのもと、万全を期した。展示室内の監視カメラの調整やアラームの追加など、展示期間中の安全にも万全を期した。

5. 紹介事例・今後の改善点等

ベーコンは、作品評価額が最も高い画家の一人で、そのことが長らく展覧会の開催を難しくしてきた。本展は、本制度が出来たことで、実現に向けての取り組みが再開し、実施することができた典型的な事例となったのではないかと思われる。しかしながら、所蔵家の意向で、本制度の適用が叶わなかった作品が少なからずあった。所蔵家の理解が得られ、すべての作品に本制度が適応できれば、さらに多くの作品を展示できる可能が広がる。国内の観覧者には本制度が適用された展覧会であることについて、展覧会場や一部チラシ、ホームページや図録への掲載などを通して告知に努めたが、今後は借用先である所蔵家にも本制度の趣旨を理解いただくための更なる取り組みも必要になると思われる。ともあれ、国内における本展への注目度や満足度は高く、来場者の評価も「とてもよかった」「よかった」で9割を超えた。なかでも、普段美術館に足を運ばない学生を含む若年層が多く訪れたのも本展の特徴であり(東京会場で20歳代までの若年層の比率が25%超)、美術鑑賞の層の拡大という教育的にも大きな成果を得ることが出来た。

6. 展覧会の収支決算書

主催者名 東京国立近代美術館、日本経済新聞社

| (収入) | | (支出) | | 単位：万円 |
|-------------|--------|--------------|--------|-------|
| 展覧会収入・その他収入 | 24,490 | 企画準備等基本経費 | 20,835 | |
| 共催者負担 | 4,917 | 設営・運営等会場関係経費 | 8,572 | |
| 収入総額 | 29,407 | 支出総額 | 29,407 | |

主催者名 豊田市美術館、日本経済新聞社、テレビ愛知

| (収入) | | (支出) | | 単位：万円 |
|-------------|-------|--------------|-------|-------|
| 展覧会収入・その他収入 | 3,946 | 企画準備等基本経費 | 4,100 | |
| 共催者負担 | 2,112 | 設営・運営等会場関係経費 | 1,958 | |
| 収入総額 | 6,058 | 支出総額 | 6,058 | |